

cm 大の空洞を伴う浸潤影を認め、CMNX 2 g／日、20 日間投与した。自覚症状、胸部X線像、炎症所見とも著しく改善したことから、CMNX は嫌気性菌にも有効である可能性が示唆された。なお、副作用として1例に軽度肝機能障害が認められた。

#### 10) 肺膿瘍の臨床的検討

嶋津 芳典・和田 光一（新潟大学第二内科）  
荒川 正昭

近年、強力な抗菌剤の出現により、肺膿瘍の臨床像に変化がみられている。昭和59年から63年の間の当科における肺膿瘍自験例19例の、臨床的検討を行った。基礎疾患は14例に認め、内訳は肺癌、慢性腎不全、糖尿病、膠原病、ステロイド大量使用例などであった。自覚症状では、咳嗽、膿性痰が多く、検査では、CRP 強陽性、白血球著増例が多かった。起炎菌は、嫌気性菌が11例中4例、S. aureus が3例と、高率に認めた。初回治療で全例が、セフェムあるいはペニシリン系抗生剤を使用し、16例中著効9例、有効3例、無効4例であった。抗菌剤の平均使用日数は39.4日で、長期使用例が多かった。空洞径5 cm 未満では、11例中9例で空洞が消失し、CRP も早期改善を認めたが、5 cm 以上では、全例で空洞が残存し、CRP の高値が遷延する傾向を認めた。予後は、16例中14例で軽快を認めた。

#### 11) 骨髄炎病巣内（6症例）への Fosfomycin (FOM) 移行性の検討

一橋 一郎・倉田 和夫（新潟県厚生連中央）

投与した抗生剤が、骨髄炎病巣内へ、どの程度に移行しているかを検討した報告は僅かで、私達はその点に着目し、まず、正常骨髄組織等に良好な移行性を報告されている FOM を用いて、急性1例、亜急性2例、慢性3例の、各病態の骨髄炎6症例の病巣郭清術に際し、術前に投与しておいた FOM が、病巣内、とくに膿中にどの程度の移行性を示すかを、同時点の血清中 FOM 濃度との比較を主体に検討を試みた結果、FOM 投与後の1～3時間で、血清中濃度の実に30～100%以上に及ぶ膿中濃度の存在を知った。この濃度は、試験菌株の FOM の MIC を充分に凌駕している上、1例の腐骨検体にも、充分に検出可能な量の FOM が存在することも示された。病態の異なる6例のみの骨髄炎症例での検討ではあるが、FOM は、正常骨髄組織のみならず、骨髄炎病巣内、とくに膿へも充分に治療効果の期待出来る

良好な移行性を示すことがうかがえた。

#### 12) 脊髄損傷患者の尿路管理の1例

平 岩 三 雄（三条総合病院泌尿器科）  
高 木 隆 治（新潟大学泌尿器科）

症例、34才、男。初診：昭和60年6月24日。主訴：脊髄損傷における尿路管理。病歴：昭和55年8月 L1 壓迫脱臼骨折による脊髄損傷にもとづく固定期の神経因性膀胱で排尿困難、尿失禁、膿尿があった。排尿困難には自己導尿、尿失禁にはペニックの装置、Pine Tree Bladder・膀胱尿管逆流にもとづく尿路感染に対しては Mild Chemotherapy でのぞんだ。経過中に慢性腎盂腎炎の急性増悪を繰り返すため、尿失禁傾向を強めるために外括約筋切開・TUR-P を行い一時は尿路感染を良く Control できたが、術後5月後の昭和62年11月1日に尿道瘻を生じ再来した。カテーテル留置と強力な化学療法にて尿道瘻は閉鎖したが、尿道憩室と高度な尿路感染が残った。尿細菌培養を見ると、何回となく菌交代現象をおこし Flavobacterium odoratum が検出され、薬剤耐性も強く感受性は CMNX などの数種類にすぎなかった。そこで昭和63年1月21日に膀胱瘻術を施行した。術後感染防止には CMNX 2 g and DKB 100mg を使用し経過は極めて良好であった。以降定期的なカテーテル交換と ENX による Mild Chemotherapy にて良好に管理されている。

脊髄損傷患者の尿路管理においては、一生尿路感染との戦いが続くので菌交代現象などを考慮すると、化学療法剤の投与は急性期や手術などの負荷のかかる時期を除いては、必要最小限もしくは細菌尿があっても臨床症状が無く腎機能が良好に保持されている場合には投与しない方がよい。

#### 13) 急性虫垂炎に対する術前、術後の抗生剤投与の影響

—特に急性相反応蛋白の変化について—  
小林 英司（町立相川病院外科）

急性虫垂炎と診断した上で保存的に経過を観察する際の抗生剤の使用については肯定、否定論があるが、抗生剤の使用はあくまでも補助的なものでありいたずらに長く、またその場しのぎで使用してはならない。今回急性虫垂炎患者（蜂窩織炎性5例、壊疽性4例、穿孔性3例）に術前 PIPC 2 g × 1回（ピギー）、術後 PIPC 2 g × II（回）（ピギー）／4日間投与した。その経過中の白血球数及び急性相反応蛋白（CRP、 $\alpha_1$ -アンチトリプシン

ン) を測定し検討を加えた。

重症型の虫垂炎でも術前の抗生素の使用で白血球数は減少傾向を認めた。術後はすみやかに正常値におちいった。急性相反応蛋白の内 CRP は第一病日に、 $\alpha_1$ -アソチトリプシンは第3病日にそのピークを認めた。

また術前の白血球数と急性相反応蛋白のパターンを検討すると、穿孔性虫垂炎及び急性腸炎例に CRP 高値パターンをとった。

以上ともすると軽視されがちな急性虫垂炎に対する抗生素使用について検討を加えた。

#### 14) 抗菌剤の胆汁内移行に関する検討

##### —胆汁酸代謝と関連して—

清水 武昭 (信楽園病院外科)  
甲田 豊・青木 信樹  
湯浅 保子・薄田 芳丸 ( 同 内科)  
関根 理

抗生素の胆汁内移行と胆汁酸代謝との関係を調べてきた。CMD, CEZ, MINO, CXM, CPZ の胆汁内移行は胆汁内胆汁酸濃度と比例し、胆汁外瘻の患者では胆汁飲用により抗生素胆汁内移行は著明に増加し、胆管炎症例は抗生素投与と共に胆汁飲用で治癒した。今回新しく開発された経口抗菌剤 CFIX と NY198 について検討してみた。胆汁内 CFIX 濃度と胆汁内総胆汁酸濃度は 5 %以下の危険率で相関があり、ことに CFIX は胆汁内ケノデオキシコール酸濃度と 2 %以下の危険率で相関があった。CFIX の胆汁内移行は胆汁酸代謝と密接な関係にある薬剤と言えることが出来た。一方、NY198 の胆汁内ピーク濃度と胆汁内総胆汁酸との間には、CFIX の場合と異なり、関連はなく、NY198 の血清及び胆汁内ピーク濃度の危険率 1%以下で有意の相関があった。CFIX と NY198 の胆汁内移行の機序は全く異なると考えられた。

#### 15) 胆道閉塞前後における抗生物質の胆汁中移行に関する実験的研究

—特に胆汁中胆汁酸との関連を中心に—

川口 英弘・福田 喜二 (新潟大学第一外科)  
吉田 奎介・武藤 輝二

雑種成犬を用い、正常時・胆道閉塞時ならびに閉塞解除後における抗生物質 (CZX) の胆汁中移行を検討し、以下の結論を得た。

①正常時においては、血液生化学検査値・胆汁中総胆汁酸濃度・胆汁中 2 次／1 次胆汁酸比の値に多少の変動があつても CZX の胆汁中移行に差は認められなかった。  
 ②胆道閉塞時には有意に胆汁中移行が不良となり、また閉塞解除直後においては血中から胆汁中へ至る逆短絡経路の存在が示唆された。③閉塞解除後 1 週目では未だ正常時に比し胆汁中移行は不良であったが、内・外瘻群間の胆汁中 2 次／1 次胆汁酸比に差を認め、CZX の胆汁中移行は外瘻群に比し内瘻群で良好な成績であった。胆道閉塞解除後の内瘻術や経口的自胆汁の摂取または胆汁酸製剤の服用により胆汁中の抗生物質の移行は良好となるが、これは胆汁中 2 次／1 次胆汁酸比の正常化で示される胆汁酸の腸肝循環の回復によることを実験的に証明した。

#### 特 別 講 演

##### 外科領域感染症

—最近の話題—

名古屋市立大学第一外科教授

由 良 二 郎先生